
彼女が出来ても友達で

快刀Z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女が出来ても友達で

【Nコード】

N8258B

【作者名】

快刀Z

【あらすじ】

主人公の森下真由美は友達の金石裕也の彼女である村井小百合に呼び出される。そして金石に近付くと言われる。真由美は裕也のことが好きだが、小百合を恐れて了承する。

「裕也^{ゆつや}に近付かないで！」

ああ、わかったよ。わかった。これ以上、あなたの彼氏さんとは何もせんから。

だから、もういいでしょ？

私はS高校一年A組の森下真由美^{もりしたまゆみ}。

今は昼休み。体育館裏で一人の女子生徒に睨^{にら}まれている。

何故かつて？それは私の友達、金石裕也^{かねいしゆうや}が村井小百合^{むらいさゆり}という女と付き合っているからだ。

詳しく言うと、村井小百合は私に嫉妬しているから。

だから村井小百合は、

「近付かないで！」

とわけのわからないことを言っている。

私と金石は友達だ。昼食も一緒に食べているし、帰りも一緒。これまでは。

でもそれは仲がいいというだけで、付き合っているわけではない。

私は金石が好きだ。だけど、金石はこの目の前の村井小百合が好きなんだ。

私が頷くと、

「さすが学年一の秀才。物分りがいいね。とにかく、これから裕也と関わりを持ったら、どうなるかわかってるよね？」

「あーわかったって。何度も言わなくてもわかってるから。大丈夫。裏切ったりしない」

私はテキストウに答える。早く終わって欲しい。

「それじゃ、森下さん。さよーなら」

捨て台詞を吐き、彼女は去っていく。

こんなことになるとは思ってもみなかった。

金石は村井小百合が好きで、村井小百合も金石が好きで。

私はそんなことを言われなくても、金石には手を出せないのに。

金石が村井小百合に一目ぼれした瞬間から、私の恋は終わっていたというのに。

「お、森下ー、どこ行つてたんだよ？」

教室に入ると、友達はるやまけんたの春山健太が声をかけてくる。どうやら金石はいないらしい。

「ちよつとね。呼び出し」

素直に答える。

「はーん、お前、また先生に褒められたんだな？ 羨ましいぞ、この野郎！」

春山は先生に呼び出されたと勘違いしているようだ。

そう思つておいてくれ。その方が都合はいい。

「あ、お前、メシまだじゃねーの？ 一緒に食べようぜ！」

いつもは金石と食べているが、ちよつどヤツもないことだ。断る理由はない。

「いいの？ 屋上行こう、屋上」

春山はいいやつだ。彼女もない。面倒なことは何一つない。

私は春山と友達でいれるかどうか、心配だった。

私には女友達が少ない。何故かはわからない。話しかけても、なかなか友達と呼べるほどにはならないのだ。

だから春山にも彼女が出来たら、私は友達がほとんどいなくなる。

他にも友達はいるけれど、同じことだ。

彼女ができれば、友達ではいられなくなる。金石みたいに。

「あのさ。春山は彼女作らないの？ すぐできそーだよな」

屋上について、昼食を食べ始めると、すぐにそう言った。

「何言つてんのお前。俺に彼女なんてできるわけねーじゃん。でもさ、高校生にもなつてこういうこと言つとガキみたいだけど、俺、

今は恋愛より友情を優先したいんだ。恋愛はまだいいかなって」
春山が眩しく笑う。つられて私も笑う。

「そういうお前はどうかなんだよ。噂とか全然聞かぬーし」

「私？ 私は……」

金石が好きだ。高校生になってからずっと。だから男遊びなんてしたことがない。

だけど、こいつに言う必要もないと思って黙っておくことにする。

「んー、わかんないな」

「わかんない？ 何だよ、それ。お前それでも健全な女子高生かつーの。俺も人のこと言えぬーけど」

春山はまた笑う。私も大声で笑った。久しぶりに、楽しい気分になった。

放課後になった。

私は金石に会いたくないので、すぐに教室を出た。

風が気持ちいい。空は青く晴れ渡っている。小鳥のさえずりが聞こえる。

昼の憂鬱な事件なんて忘れかけていた。その時、

「森下！」

背後から私を呼ぶ声が。振り向くと春山がいる。

「何？」

「金石がさ、お前に話があるから教室」

私は春山が言うのを遮って、言った。

「『彼女とお幸せに』って言うついで。私帰るから。じゃ」

金石の名前を聞きたくなくて、春山が止める声を振り払って帰った。さっきまで心地よかった空の青も、憎いだけの存在になってしまった。

帰りながら何故か涙が出た。私は泣いた。ゆっくり歩きながら泣いた。

家に帰ると、二歳年上の兄が

「おかえり」

と声をかけてくれた。

「ただいま。お母さんは？」

「まだ帰ってないよ」

「そう」

それだけ言うと、私は二階の自分の部屋に向かった。

お母さんには夕飯が何か聞こうと思ったけれど、まあいいや。

今日出たたくさんの宿題を早くやってしまおう。それしか頭になかった。

一時間くらい経っただろうか。プルルルル。プルルルル。

シンブルな呼び出し音が流れる。私のケータイだ。画面を見ると、メールが来ている。

差出人は、金石。

私はケータイを閉じてしまおうと思った。金石と話すことは何もない。金石と関わりと私の学校生活がどうなるかわからない。

だけど内容が気になって、メールを開いてみた。

『何で真由美ちゃんが、俺に彼女できたこと知ってるの？』

その一文だけだった。私は今日、あの女子生徒達に金石と関わりなと誓った。

だからメールを返信するのはまずいと思った。

「真由美、ご飯よー」

いつの間にか帰ってきたお母さんの声が聞こえる。

「とりあえず、ご飯食べよう」

はーいと返事をしながら、私は一階へ降りた。

昼の出来事も、金石のメールも、どうしてもよくなるくらいおいしい夕食だった。

でも、私は忘れることができなかった。

金石のメールばかりが頭の中をぐるぐる回って、離れなかった。

夕食が終わって、私は現実と向き合わなければならなかった。

金石に返信するか、否か。悩んだ。

誰にも相談できなかった。相談すると広まって、金石の彼女の村井小百合が何をするかわからない。それが怖い。

けどこのまま返信をしないのも、金石に失礼な気がする。それに、金石は私が村井小百合に近付くと言われたことを知らないのだ。

それはあまりにもかわいそうだ。私はケータイを開いて、素早く指を動かす。

『噂で聞いたから。それと、もう関わらないで』

関わらないで、なんて本心じゃない。本当は、金石ともっと一緒にいたかった。もっと話したかった。

だけど私は村井小百合が怖いから、自分に嘘を吐いて金石を突き放すんだ。

私は送信すると、宿題の続きを始めた。

目が覚めると、頭が痛い。風邪だろうか。喉も痛いような気がする。

「学校、行かなきゃ」

そう思っ、着替え始めた。体は重かった。それでも休むという選択肢はなかった。

教室に入ると、金石と目が合った。気まずい。

「真由美ちゃん」

名前を呼ばれる。駄目、無視しないと。

「真由美ちゃん！」

私が無視して自分の席に向かおうとすると、金石がこちらへやってくる。

逃げられない。そう思った。金石の目を見られない。

「何？」

「メール見たよ。何アレ。どういう意味？」

「どういう意味ってそのままでしょ」

そういうと金石は黙り込んだ。今がチャンスだ。

私はもう一度自分の席に行こうとした。だが腕をつかまれた。

「待ってよ。それだけじゃ俺、納得いかない。俺さ、小百合がずっと好きで、真由美ちゃんに相談してた。真由美ちゃんいつも応援してくれてさ、嬉しかったんだよ。で、告ってみたらOKだったし、真由美ちゃんに一番に報告したかった」

確かに私は金石の相談に乗った。金石に告白したらって言ったのも私だ。

金石に幸せになってもらいたかったから。

私は金石の足を思い切り踏んだ。

「いたっ！」

「彼女できてよかったね。おめでとう。これからは一切私に近付かないで」

金石を精一杯睨みつけて自分の席に向かう。

いつの間にか、クラスメートが私と金石を見ていた。

恥ずかしい。村井小百合がいなか探すが、どうやらないようだ。よかった。

金石に触られた、というだけで何をされるかわからない。ここにいる人が、どうか村井小百合に告げ口しませんように。それだけを祈った。

しかし、心配していたことは起こった。昼休みにまた呼び出されたのだ。

相手は村井小百合、以外ではないと思う。今日の朝のことだろうと思う。私が休み時間にトイレに行っている間に、机の上に手紙が置かれていた。

『昼休み 屋上 一人で』

それだけしか書かれていなかった。

相手もこれだけではわからないが、私は村井小百合以外の人間に恨まれるようなことはしていないはずだ。少なくとも私はそのつもりだ。

午前中の授業が終わると、すぐに屋上へ行った。

今日は頭が痛かった。体もだるい。だから、早く片付けなければならなかった。

「こんなにすぐに会うことになるなんて、思いもしなかった」

案の定村井小百合だ。

「こんにちは、村井小百合さん？　できるなら会いたくなかったよ」
「それはあなた次第よ？　今日の朝、覚えてるでしょ？」

私はこんなことになるまで、村井小百合という人物の性格がこんなに悪いとは思いもしなかった。

金石も妙な女に惚れたものだ。こんなことになるなら、こんな女絶対やめとけて止めればよかった、と少し後悔する。

「今日の朝？　何のこと？」

とぼけてみせる。

「あなたは学年一の秀才なのに、今朝のことも覚えていないの？　いつものテストの結果は、嘘なの？」

村井小百合は嫌味を言う。私が秀才だろうと何だろうと、金石とは関係がないのに。

「森下さん、今日裕也はあなたと昨夜メールしたと言ってたの。あなた、昨日私達と約束したわよね？　関わらないって。それなのに、どういうこと？」

村井小百合の目に、段々と怒りが表れる。周りの女子生徒も、私を睨み付ける。

私はどう説明すればいいかわからなかった。確かに私は金石にメールをした。しかし、それは金石がメールしてきたからなのだ。私から関わるうとはしていない。

だけど、そんなことを今言ったからといって、この人には理解でき

ないだろう。言い訳だと言われるのがオチだ。私が黙っていると、
「何か言いなよ」

急かす声が聞こえる。そんなことを言われても、何を言えばいいか……。何を言っても、怒りそうだ。

「もう関わらないでって約束したじゃない？ それなのにあなたはすぐに裏切るの!？」

突然、村井小百合があたしの胸倉を掴んでヒステリックに叫ぶ。

耳が痛い。朝の頭痛がひどくなっていく。視界が歪む。そのまま意識を飛ばしてしまった。

私は保健室に來ている。

気が付くと、私は屋上に横たわっていて体が重かった。

それだけでなく、顔が腫れていた。たぶん殴られたのだろう。

それでとりあえず保健室に來たのだ。幸い保健の先生はいて、手当てをしてくれた。

「何か、あったのかしら？」

先生はにつこり笑う。

「ええ、まあ。覚えていませんけど、何かあったんでしょうね」

私は曖昧に言う。しかしこれは本当のことだ。

村井小百合が怒鳴った後からの記憶が、ない。私が何故倒れていたのかもよくわからない。顔が腫れているのかも。殴られたのだろうと予想はつけられても、本当のことを確かめるには村井小百合に聞くしかない。

その後の質問には適当に答え、私は保健室を後にした。

それから一週間近く経ったが、村井小百合は何もしてこない。

私が金石と関わらなくなったからだろう。だが、私は一人でいることが多くなってしまった。

前は金石と一緒にいろんなことを話した。楽しかった。離れてから、金石にいた時間がこんなにも長かったことに気付いた。

今は一人だ。もちろん金石は彼女である村井小百合と教室にいる。どうせなら、誰にも見えないところでイチャついてくれ。

他に友達がいらないわけじゃない。だけど、邪魔をしているみたいで悪く感じた。

二人は仲良さそうに話す。私は、村井小百合と楽しそうにしている金石の後ろ姿さえも、見る事ができない。

耐え切れなくなって、立ち上がった。中途半端に食べたお弁当を急いで片付けて、教室を後にした。すでに涙は出ていた。

薄暗い廊下を歩きながら、声を押し殺して泣いた。擦れ違う生徒達が、驚いたようにこちらを見る。けれど、それを心配できるほど余裕はなかった。

人目を気にせず泣いた。頭がガンガンするほど、泣いた。

どこに行くつもりだったのだろう。

歩き続けていると見慣れない階段を見つけた。ここはどこだろう？

私はどれくらい歩いたのだろうか？

校舎内であることは確かだが、迷ってしまった。腕時計を見る。まだ授業が始まるには時間がある。階段を上つてみると、大きな扉がある。

その時、扉の向こうから

「好きです！ 付き合ってください！」

告白だ。女の子が告白しているようだ。まずい。聞く気はなかったのに盗み聞きしてしまった。

突然扉が開かれて、女の子が飛び出してくる。泣いている。私を無視して、階段を下りていった。

屋上で告白でもしたのだろう。失恋、みたいだ。私と同じだな……。でも告白できたのはすごい。

私なんて、告白する前に失恋してしまった。

結果がわかっていても、告白できる勇気があればいいのに。

次の日の昼休み、授業が終わってから教室を出ようとした。

「真由美ちゃん」

後ろから声がかかる。振り向かなくてもわかる。私がずっと好きだった声。金石の声。

「何？」

無視するわけにもいかない。あの時みたいに腕を掴まれたら、泣いてしまいそうだ。

「最近さ、全然話してない。俺が小百合と付き合ってから。……俺、今でも真由美ちゃんと友達だよな？俺、今まで真由美ちゃんと一緒に昼食べてたし、小百合もいるけど一緒に」

「二人の邪魔する気はないから」

震える声でそう言った。

「大丈夫。小百合も真由美ちゃんと仲良くなれるよ」

何だつて？金石は村井小百合が私に何したか、知らないからそんなこと言えるんだ。

村井小百合と私が友達に？冗談じゃない。

私は、私のことを故意に傷つけてくる人とは仲良くできない。

「私いたら邪魔になるから。それに、関わらないでって言ったでしょ？」

横から視線を感じて目を向けると、村井小百合がこちらを見ている。睨まれた。

「何でいきなりそうなるわけ？俺ら、友達じゃないの？」

しつこい金石に、怒りを感じた。

「だから！関わらないで！」

金石、好きだよ。そう、素直に言えば、どんなにいいだろうか。

「もう金石とは友達でも何でもないから！あんななんて嫌いだよ！」

金石のこと、大好きだ。金石が村井小百合をどんなに好きでも、私は金石が大好きだよ。

「裕也。もういいよ。私が森下さんと仲良くなりたいてって言ったの

が駄目だったんだよね。ごめんね。私、森下さんと仲良くなるの、諦めるから。だから喧嘩しないで？」

横から村井小百合が残念そうに言う。

私と仲良くなりたいなんて嘘だろ？ 男の前ではそんな声で甘えるんだ。男の前でも平気で嘘吐くんだ。

村井小百合って、そんなに嫌な女だったんだ。

「真由美ちゃん。俺を嫌いって言うのはいいけど、小百合を泣かせたらマジで怒るから」

今度は金石が私を睨みつける。

ああ、金石は村井小百合の毒牙にかかってしまったんだ。金石。そんな男だったなんて、期待はずれだよ。

それでも好きだ。これから、ずっと好きだ。

村井小百合が怪しい笑みを浮かべてこちらを見る。怖い。

すると、春山が近付いてきて、私の腕を引っ張って教室を出る。

「春山！？」

金石の驚いた声が聞こえる。

私は声にならない。春山は無言で階段を上がる。そして屋上に。

「なあ森下。お前さ、何か隠してねえか？」

屋上の隅に座ると、話しかけてきた。

「別に隠してないって」

正直に答える気にはなれなかった。

「嘘。金石が村井と付き合ってから、金石への態度おかしいよ」

私は本当のことを言うべきか迷った。

私は金石が好きだけど、金石を避けているのは嫉妬だけではないし、でもその理由を言ってしまうえば、村井小百合に伝わってどうなるかわからない。

でも、嫉妬だと言えば納得して何も聞いてこないかもしれない。それだ。それにしよう。

「私、金石が好きなんだ。目の前でラブラブなの見せられるの、嫌

だから」

「お前金石が好きだったのか！？ マジかよ？」

「マジ」

「へえ。初耳だぜ。たぶん、これ知ってるのお前と俺だけだな。誰も気付かないぜ？ お前ら、仲のいい友達にしか見えねえもん」

私は気持ちを隠しきれているみたいだった。安心した。

「金石は、友達だと思ってるよ」

「そうだろうな。あいつ村井と付き合ってるし」

会話はそこで途切れてしまった。ちょうどいい。私は昼食を食べなきゃならない。

「春山、私弁当食べるから教室戻るよ」

春山は何も言わなかった。

教室に入ると、みんなが私を一斉に見る。何があつたのか知りたいのだろう。

私はかばんから弁当とペットボトルのお茶だけを取って、教室を出た。

私は、どこへ行けばいいのだろう。金石が村井小百合と付き合ってから、私は教室で食べていたけれど、これからは耐えられない。

金石の隣が、私の居場所だったように思う。村井小百合と付き合う前は、本当に、ずっと一緒に居たんだ。

気付かなかったけれど。

だけど、そこはもう村井小百合の特等席だ。私は譲るしかない。

こんなことなら、もっとたくさん友達を作っておけばよかったと後悔した。

私の足は自然と中庭へと向かっていた。

中庭には幸い、知っている人は誰もいなかった。

そこでひっそりと弁当を口に押し込んだ。

においも味も、感じなかった。

教室に帰ると、村井小百合がいない。金石は友達と話している。どうしてだろうか？

自分の机を見る。紙。まだだ。

『今すぐ屋上に来い』

村井小百合だろうか。いや、彼女だろう、こんなことをするのは。

「森下さん。私あなたと会うの、嫌なんだけど？ 約束ちゃんと守ってよね」

屋上の扉を開けると村井小百合がいた。呼び出されるのも三回目だ。「私も、あなたと会うのは嫌」

「だったらちゃんとしなさいよね？ 今日、裕也があなたに嫌いって言われて、傷ついてたよ。フオローするのにどれだけ大変だったかわかる？」

それは、確かに私が悪い。

「呼び出しても駄目なら、体でわからせるしかないよね」

村井小百合は私の胸倉を掴んだ。そして、一発、顔を殴られた。頬が痛い。口も切れたかもしれない。

私が下を向いていると、髪を引っ張られた。

「うつむいてんじゃないわよ。裕也はね、私のものなの。あんなんかに渡さないんだから！」

「村井、さん。私にこんなことしなくても、金石は」

話している途中なのにもう一発殴られた。

「気安く裕也の名前呼ばないでよ！」

村井小百合の表情に、憎しみが溢れている。こんなに恨まれたのは、きつと初めてだ。

「……村井さんのことが好きだよ。私に恋愛感情持ったことなんて、ないよ」

「あなたに何がわかるのよ!？」

わかるよ。嫉妬に狂う村井小百合には見えない、金石の心がね。

金石は本当に村井小百合のことが好きだ。何ヶ月も前から、好きだ。「むかつくんだよっ」

村井小百合の拳が私の腹に刺さる。呼吸ができない。

金石、もう殴られるのは嫌だ。痛い。苦しい。助けて。

「てめえ！ 何してんだよ！？」

突然聞こえたのは、男の人の声。誰？ 金石だと、いいな。

「は、春山くん！？」

村井小百合は焦ったように言う。春山か。春山が来たんだ。

少し残念に思った自分に腹が立つ。

「おいっ、森下。大丈夫か」

私の頬をペチペチと冷たいものが叩く。春山の手だ。私はコクンと頷いた。

「そうか。保健室行くぞ。立てるか？」

私は黙って立ち上がった。体が痛い。それ以上に心が、痛い。

「付いていこうか？」

「……一人で行くよ」

急に、金石のことが心配になった

金石にこのことは伝わるのだろうか。別れてしまうのだろうか。

嫌だ。折角、金石は好きな人と両思いになれたのに。

金石は、例えば村井小百合と別れても、私を好きになってくれるわけじゃない。

それなら、金石が好きな人と一緒に居て欲しい。相手が村井小百合だとしても。

「OK。こいつは俺に任せろ」

春山の声で現実を引き戻される。春山は村井小百合を傷つけたりしないだろうか。

大丈夫だ。春山は悪い奴じゃない。

私は春山を信用して、また頷いた。

痛む体を必死で動かして保健室に着く。扉を開ける。

「失礼します」

中に入るが、先生はいないらしい。その代わりに金石がいる。一番会いたくなかった人物だ。

「あれ、真由美ちゃん？ それ、どうしたの!？」

話してもいいだろうか。

どこかで村井小百合が見ているような気がしてならない、怪しい笑顔で。

私が答えないでいると、金石はため息をつく。

「手当てしてあげるよ。座って」

金石は私の手を引っ張って、座らせた。

「あのさ……嫌いって言うてごめん。傷つけるつもりはなかった」
手当てが終わると、金石の誤解されたくなくて口を開いた。

「気にしてないからいいよ」

気にしてないということとは、私なんかどうでもいいということなのだろうか。

友達に嫌いと言われて、良い気分はしないはず。金石は私のこと、嫌い？

「……金石」

実際に名前を呼んだのは、久しぶりな気がする。さつき村井小百合に言ったのは除いて。

心の中では何度も呼んだのだけれど。

「好きです」

溢れるように出た。やってしまった。

「え」

金石は目を見開いて驚いている。当然だ。今までそんな素振り、見せなかったのだから。

「冗談とかじゃなくて、本当に。今までずっと好きだった。でも諦めるから」

「嘘だよな？ 真由美ちゃん、今まで恋愛相談にも乗ってくれたじ

やん」

「嘘じゃないよ。金石が好きだ。金石には幸せになって欲しい。彼女さんと仲良くね」

泣きそうになる。駄目、堪えないと。

「何で？ 何で言ってくれなかったの？ 言ってくれば真由美ちゃんを好きにはなれなくても、恋の相談なんてしなかったのに。傷つけたり、しなかったのに。ごめん」

金石は苦しそうな顔をする。

こんな顔が見たかったわけじゃない。こんな顔させたくなかったから、今まで黙ってきたんだ。

何で、言ってしまったんだろう。

「金石は悪くないから。……もう行くね」

私が保健室から出ようとすると、

「真由美ちゃん。ありがとう」

金石は今まで見たことのない笑顔で微笑んだ。

すると涙がこぼれそうになって、それを金石に見られたくなくて急いで部屋から出た。

出た瞬間に涙が止まらなくなって、近くのトイレに駆け込んだ。声を押し殺して、泣いた。

どれくらい泣いただろうか。すでに午後の授業は終わっている。教室に戻らないと。

金石に、想いは伝えたんだ。もうこれですつきりした。

金石も私に関わってやることはないだろう。村井小百合も、春山がどうにかしてくれたはず。

私の恋が終わった。

辛いことが多かったけど、何年か経てばいい思い出になるのだろう。私は軽い足取りで教室へ向かった。胸のもやもやに、別れを告げて。

（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8258b/>

彼女が出来ても友達で

2010年10月9日00時12分発行